



本日は、8月に開催された九十九里地域医療夏期セミナーに参加した学生にお話しを伺います。彼らは11月に開催された学園祭にてその活動成果発表を行いました。

どうして、このセミナーに参加しようと思ったのですか？

(河崎) 私は今、実務実習を行っているのですが、実習施設である「さんむ医療センター」が「緩和医療」について、このセミナーに参加されると耳にしたので……。今後少子高齢社会を迎えるにあたって、がん患者数は増えていこうし、一度緩和ケアの実際に触れてみたいと思ひまして……

(三浦) 僕は、去年参加された先輩のレポートを読んでいて……、「僕も、参加したいな」って単純に思っただけ。こう言ったら何だか、大学だけの生活は毎日と同じことの繰り返しで……。新しい世界という環境を知ってみたいという好奇心で参加を決めました。

3年生の3名は、今回「スタッフ」として参加したようですが？

(名執) 2年生の「福祉論」の授業の中で、大学のある「山武医療圏」は全国でも有名な医療過疎地域であることを知って、その現状を是非とも知りたくて……。でも、セミナーは「定員制」だったので、最初から「スタッフ」だったら、確実に参加できるのかなって思ひまして……。

(工藤) 私はここ東金が地元だから……。将来はどこで就職するかわからないけど、家族が住んでるこの町の医療を知って、薬剤師としていつか少しでも貢献できたらなって思っただけで参加を決めました。

(石山) 大学では「地域医療」について、いろいろと日々勉強しているんだけど、何となく「実像」がイメージできなくて……。地域の医療従事者ともこれまで出会う機会がなかったので、チャンスかなと思ひました。

(工藤) でも、実際は光本先生に声をかけてもらったことで、背中を押してもらえたよね(笑)

では、実際に参加してみて……

(名執) 僕は「救急車が不足している現状」に興味がありました。最近では、「タクシー代わりに救急車を利用する人がいるから、本当に必要な人が利用できていない現状がある」と聞いていたので……。

(工藤) 小さいお子さんなんか、少し様子がおかしいと、やっぱり母親としては不安になってすぐに救急車呼んだりしちゃうんだろうね。

(名執) そんな時は、まず「#8000」に電話をすることも一つなんだから、救命救急士の方に教えてもらいました。

(石山) 「#8000」はプッシュ回線の電話であれば、全国一律で各都道府県の相談窓口へ自動転送され、小児科医師や看護師から、症状に応じた対処方法や、受診する病院のアドバイスを受られるんだよね。

(河崎) でも母親の立場だったら、本当にそんなに冷静に電話できるのかなあ？ 最近では、救急車が出動しなかったことで患者さんが亡くなったなんてニュースもあったし……。

(三浦) 難しい判断だよ。一般の生活者にとっては、「今の状態」が救急医療を必要とするのかどうかなんて、判断できないだろうからね。

(名執) 今回のセミナーでは、僕たちを含めた多くの人の「医療や福祉に対する意識付け」が大事だなんて感じました。恥ずかしいことだけど、ホント地域の医療体制について知らないことが多すぎて……。だから、身近に感じる救急車なんかには、「気軽」にアクセスしちゃうのかなって感じました。

(工藤) ある意味、救急医療という行政が市民にとって身近っていうことは、市民にとってはありがたいことだけど……。現状を打破するためには、「救急医療の現状」をもっと多くの市民に知ってもらうための活動をしていかなきゃいけないよね。

(石山) 私たち、医療を学ぶ大学生にもできることを、すごく考えさせられた2日間だったね。

緩和医療の実際と QOL

(河崎) 私は「さんむ医療センター」で実務実習していて、夏期セミナーで学んだことがすごく活かされていると実感しています。この病院は「緩和ケアチーム」が医師や看護師、薬剤師など多職種連携で構成されていて……。患者さんへの包括的アプローチと薬剤師の役割を勉強することができています。

(石山) 「最期は自宅で」って患者さんが増えていると耳にしますが、やっぱり在宅も多いんですか？

(河崎) そういう患者さんが本当に多くて、在宅はとても重要。これまでは薬剤師の業務として服薬コンプライアンスの向上支援とか薬歴管理が大事なことが分かっていただけ、それ以上に患者さんやそのご家族との信頼関係の構築が大事だったこと、本当に胸にしみてくる。チームの大切さと難しさも、セミナーでは感じていたんだけど、実際に実習で携わっているといろいろ感じる場所があるの。患者さんやご家族は、医師や看護師、薬剤師といった異なる専門家からいろいろな情報を得ているから、ときどき「違った解釈」をされたらどうしようかって不安に感じることも……。この前の看護師さんと、仰っていることが違いますね。なんてこと言われたらどうしようってね。だからチーム内で決定された治療方針を徹底的に理解することの重要性、そう、医療者間でのコミュニケーションの重要性ってことがすごく勉強になっているって感じる。

(三浦) 緩和ケアは、終末医療の一部としてホント大事なことだよ。セミナーで患者さんの QOL (quality of life) については、ホントいろいろと考えさせられたよ。その中で、東金病院の平井先生が、「Quality of Death」ってことを仰ったことがとても印象的だった。「死の質」ってどういうことなんだろうって……。

(石山) QOL って、「生活の質」って言われるけど、本当に生活者一人ひとりの「生活の質」って何だろうって考える機会にもなったよね。

(工藤) こう言ったら何なんだけど、「結局は他人で、何を考えているのか、正直わからない時もあるし……」。

(三浦) だから、「人を知る」ってことは本当に大事なことなんだよね。大学でもヒューマンズムとか学ぶけど、実際に同じ目線に立って、同じ環境で時間を過ごせたら、もっと他者を理解できるんだと思う。だからこのセミナーに参加して、患者さんばかりでなく、多くの地域医療を志す人たちを「知り得て」、同じ時間を共有できたことは僕にとっては、本当に大きな経験になったと思う。

(名執) そうですよね。せっかく、いろいろなことを「知る」ことができた2日間だったから、今度はそれを「活かすための行動」に移さなきゃいけないですね。僕たちはちょうど11月上旬の学園祭で、口頭発表や展示ブースでこの地域の医療の現状について発表するけど、一人でも多くの来場者にメッセージが届くように、鋭意努力したいと思います！

これからの自分に……

(河崎) 私は、病院への就職を考えているから、セミナーを通じて感じたことを少しでも、現場で体験できるようになりたいなって思ひました。まだまだ勉強することがたくさんあるんですけどね(笑)

(三浦) 僕も病院を考えています。積極的に行動を起こして、人との出会いや繋がりを大事にしたいですね。自分から動かなければ、いい出会いや繋がりがも築けないでしょうからね。

(工藤) 私たちは、まだまだ勉強かな。学ばなきゃいけないこと、いっぱいあるんだって思えたからね。

(名執) そうだね。後は姿勢だよ！ 今回参加した他大学の学生の向学心という積極的な姿勢って言うのは、見習わなきゃいけないかなって思えたしね。

(石山) ホント。待っていても何も始まらないんだから、自分たちからアクションを起こせるような学生生活をこれから過ごしていきたいね。



3年生 工藤瑞稀 千葉県 県立東金高等学校出身 | 5年生 河崎愛実 山口県 誠英高等学校出身 | 5年生 三浦裕馬 千葉日本大学第一高等学校出身 | 3年生 石山未奈子 静岡県 加藤学園高等学校出身 | 3年生 名執翔 東京都 都立日野高等学校出身

「遠くの大病院よりも、近くの頼れる薬剤師に！」

超高齢化と国際化が進む日本社会のこれからの地域医療を支えるために、主体的に行動できる薬剤師の輩出を目指しています。

従来の医療薬学のみならず、栄養、福祉、看護・介護、セルフメディケーションなどの幅広い専門知識と国際感覚を有し、あらゆるライフステージにある人々の健康に興味・関心を抱き、人々から信頼される、地域に根ざした薬剤師を養成します。

21st JIU FESTIVAL

3-5 November 2012

TRUST

～想いを束ねて新たなる一步を～



九十九里地域医療夏期セミナー



Herb Project 2012



Bright Melody



九十九里地域医療夏期セミナー



食育ゼミ



Herb Project 2012



2013年度生 募集 大学院 薬学研究科 医療薬学専攻 博士課程

城西国際大学 入試・広報センター TEL: 0475-55-8855 E-mail: admis@jiu.ac.jp <http://jiu.ac.jp/pharmacy/graduate/index.html>